

# 調査コラム～史料調査の現場から 第34回

松江市の「ヒストリー」集の公開－特色ある松江の文化、文化財を歴史で紡ぐ目論見－

はじめに

松江は歴史文化や文化財に恵まれたまちです。2022年の「松江市まちづくりのための市民アンケート」によると、松江のまちに愛着を感じている人は80%にのぼります。その背景に、豊かな歴史に裏打ちされた文化や景観があることは想像に難くありません。また、松江市にとって重要な産業に観光があります。2023年からの「MATSUE 観光戦略プラン」では、コンセプトとして「Authentic Japan “MATSUE”～城下町 水の都 暮らしに息づく伝統」とうたわれています。ホンモノの日本があるまち、松江、という意味ですが、これも豊かな歴史文化に裏打ちされているからこそそのフレーズでしょう。

「MATSUE 観光戦略プラン 2023-2029」[https://www.city.matsue.lg.jp/kanko\\_bunka\\_sports/kankojoho/13045.html](https://www.city.matsue.lg.jp/kanko_bunka_sports/kankojoho/13045.html)

それでは「ホンモノの日本」と言える松江の歴史文化とは何でしょう。国宝松江城天守、ユネスコ文化遺産佐陀神能、美しい宍道湖、古くからの寺社、古代出雲文化や神話、小泉八雲、伝統的な食文化、茶の湯の文化、美肌の温泉、日本海の自然などが一般的にあげられます。それぞれ個別の魅力は素晴らしいものです。しかし、それだけで「ホンモノの日本」が語れるほどの松江の魅力が説明できるでしょうか。観光のキャッチフレーズを責めているわけではありません。それを「ホンモノ」というためには、個の集合ではなく、それぞれがどのように関わりあってきたのか、そしてどれだけの歴史的背景が重なって今があるのか、というストーリーを明らかにしないと、表面をなぞった深みのないものになってしまいます。

## 「松江市文化財保存活用地域計画」と「ヒストリー」

松江市は2021年12月に「松江市文化財保存活用地域計画」を策定し、文化庁から認定を受けました。文化財を活かしていくためのマスタープランですが、計画の柱の一つとして、「ヒストリー」を紡ぐ、という項目があります。数多くの歴史文化のパーツを、空間、時間を通じて結び付け、物語として多くの方に親んでもらうとともに、個別の文化財にも新たな価値や深みを付与しようという試みです。松江のことですので、ヒストリーのテーマはたくさんできます。令和4年度は

- 松江の石をめぐるヒストリー
- 特色ある松江の食と名物のヒストリー

の2本を作成し、この4月に松江市のホームページに公開しました。

「松江の石をめぐるヒストリー」は、今でも松江の特産品として親しまれている「めのう」と「来待石」を中心に、長い歴史の中でどのように石が利用され、今につながっているかを紡いだものです。

「特色ある松江の食と名物のヒストリー」は、約7000年前の縄文時代から説き起こし、松江の自然や風土の中で、どのようなものが食され、また名物として発展してきたかを解説したものです。いずれも、長い文章になっていますが、多くの写真を使ってわかりやすく編集してありますので、ぜひ読んでみてください。

「ヒストリー（文化財をつなぐ物語）」[https://www.city.matsue.lg.jp/kanko\\_bunka\\_sports/rekishibunkazai/4/plan/15074.html](https://www.city.matsue.lg.jp/kanko_bunka_sports/rekishibunkazai/4/plan/15074.html)

## 来待石の狛犬

さて、コラムとして取り上げたいのは、私がヒストリーを作成していく中で、あらためてその価値と面白さに気づいた、来待石です。来待石の利用には古い歴史があるとともに、非常に幅広く利用されています。その詳細は本文を読んでいただくとして、その中でも「狛犬」について感じたことを記してみたいと思います。

狛犬は神社の鳥居や社殿の前に、一対で鎮座しています。松江市内をはじめ出雲地方の神社のほとんどは、来待石でできた狛犬がおられます。実はちょっと前までは狛犬とは呼ばれず「からしし」と呼ばれていました。近くの神社で見てもらうと、双方とも犬ではなく獅子であることが分かります。獅子はライオンで、日本にはいませんから、外国という意味合いの「から」が付いた「しし」と呼ばれたわけです。標準語の浸透で、松江でもほとんどの人が狛犬と呼ぶようになりましたが、からししの方が実態に即した呼び名だといえます。

## 2種類の型—「お座り型」と「クラウチング型」



来待石でできた狛犬をたくさん見ていくと、大きく2種類の型があることに気づきます。一つは前足をそろえて座っている「お座り型」【写真1】【写真2】、もう一つは腰を上げて身体を少し引き、今にも飛びかからんか、という「クラウチング型」【写真3】【写真4】です。陸上短距離のクラウチングスタートで「用意」の掛け声がかかった瞬間のランナーを思い浮かべるとよいかと思います。

左【写真1】「お座り型」の狛犬1：生馬神社（松江市東生馬町）

右【写真2】「お座り型」の狛犬2：佐陀神社（松江市鹿島町）



左【写真3】「クラウチング型」の狛犬1：玉結神社  
(松江市美保関町)

右【写真4】「クラウチング型」の狛犬2：田原神社  
(松江市奥谷町)

2タイプの使い分けの意味は分からず、両方の種類が鎮座する神社もあります。江戸時代にさかのぼるのは確実に、神社の氏子さんたちが、対照的な2つの型のうち、おらが村の氏神さんに合った型はどちらかと悩んでえられたのではないのでしょうか。

### 「来待スタイル」のすごさ

もちろん二つの大きな型の違いはあるものの、顔の作り、例えば耳が寝ていることや、尾が立ち上がっていることなど、共通点も多くあります。全体のデザインのイメージは共通しているといっていいいでしょう。文章ではうまく表現できませんが、パッと見て、これは来待だ、と感じる独自スタイルがあるのです。私は来待石で作られた共通のスタイルを持つ2つの型の狛犬を総称して「来待スタイル」と呼ぼうと提唱しています。これらの詳しい特徴や、数多くの狛犬の説明は、廣江正幸さんと永井泰さんが『出雲・石見狛犬見聞録：来待石・福光石の唐獅子文化』（2012年、ワン・ライン発行）にまとめておられますので、もっと深めたい方はぜひ手にお取りください。

廣江さんと永井さんの調査によると、出雲地方には千体以上の来待スタイルの狛犬があるそうです。松江市民の皆さんも、近所の神社に行くと、ほぼ来待スタイルを目にすることができると思います。それだけ確立した技術とスタイルが行き渡るネットワークが、来待石採取職人（来待周辺）、加工職人（松江の町場に多い）と神社の間にあったわけです。

来待スタイルのすごさはそれだけにとどまりません。全国には多くの狛犬研究者や愛好家がおられます。そうした人々の間では、「出雲流」とか「出雲型」というような狛犬の分類が確立しています。狛犬は、全国隅々まで見られるものですが、わざわざ出雲を冠した類型が、どうして愛好者の間で共通認識になっているのでしょうか。



【写真5】川原神社（松江市川原町）の「クラウチング型」狛犬

一つは、来待スタイルの狛犬が、出雲地方だけでなく、各地で見られるからです。特に日本海沿岸、現在の山陰から近畿北部、北陸地方、東北地方に多く分布し、北海道も北端の稚内市や利尻島、礼文島まで広がっています。近世から近代にかけて、大阪から日本海を経由して物資の流通を担った北前船に載せられて、特に北に向かって流通したものと考えられます。商品になって遠隔地の神社に鎮座した、ということは、まさに来待としてブランド化がなされていた可能性が高いのです。

もう一つの理由は、あくまで個人的な意見ではありますが、来待スタイルの狛犬が優品だからだと思います。来待石が素材として持つ魅力と、迫力ある狛犬を作り出す技術、そしてなにより全体のフォルムと細かな細工が織りなす姿は、石造物としての一つの完成形を示していると思うのです。

たとえば、「お座り型」は前足を蹲踞（そんきょ）した後ろ足にぴったりとくっつけます。それにより背筋が伸び、ぐっと上げた顔とのラインとともに「気を付け！」という掛け声が聞こえそうです。そこに、まっすぐ立ち上がる尾が付随して、全体に縦の方向性が強調されます。他地域の座った狛犬は、前足が離れているため、胴体が斜めになり猫背がちにな

るのです。また、「クラウチング型」は、斜め後ろに引いた腰にふと過ぎない精悍な後ろ足が踏ん張り、いまにも飛び掛からんばかりです。このタイプでも、胴体から離れて立つ尾が効果的です。どちらのタイプも、装飾は華美ではなく、獅子の毛の動きを基調としたものであることも、神社の森厳さにマッチしていると感じるのです。

## おわりに

このような来待スタイルの狛犬も、いま消滅の危機にあります。来待石は軟らかい石で、それが加工のしやすさと、短期間で風雅な色合いを出す特徴につながるのですが、その一方で風化もしやすいのです。通常は100年、長いものでも200年程度で表面から剥がれたり崩れたりします。そうなるとう狛犬を作り替えることになりませんが、強くて安い外国産の御影石などに変わることが多いのです。来待石の切り出しや加工をする職人さんが減っていることも要因でしょう。時代の流れにはあらがえませんが、一世を風靡した来待スタイルがどんどん減っていくのはつらいことですし、松江が生み出した日本を代表する工芸文化がなくなるのはもったいないと思います。

他の地域では来待スタイルの二世もみられます。作り替えるにあたって、入手しやすい石を使いながらもデザインは来待を踏襲するわけです。このような形でも、伝統的な来待スタイルを後世に残すことができないものでしょうか。さらに言えば、100年もてば上等という考え方はできないでしょうか。あらゆるものは更新をしなければなりません。更新が100年、というスパンを短いと考えてしまえば、来待石の文化は継承できません。伝統文化を松江の魅力として売り出していくなれば、目立たない石造物（狛犬は決して目立たないものではないのですが）であっても、大切にしていける心構えも市民の間に醸成していくことが大事だと思います。

冗長に来待スタイルの狛犬について書いてきましたが、特徴的な狛犬の存在をどれだけの方がご存じでしょうか。そこかしこに神社がある松江では、狛犬はありふれたものかもしれませんが、深めてみると地域を特色づける歴史文化の代表の一つとわかってきます。ヒ

ストーリーは、このような見えにくい価値を市内外の人に伝えることも目的としています。あなたの目の前に、松江の特色ある歴史文化が存在するのです。

(松江市文化スポーツ部文化財総合コーディネーター/丹羽野裕/2023年5月22日記)